

CO2と経営

8

環境と財務の「見える化」へ

珧珀色のガラスと頭頂部、白い外壁と泡のあふれるビールジョッキをイメージしたという特徴的なデザインのアサヒビール本社は、建物内のすべての電力を「グリーン電力」でまかなっている。同社の財務状況と事業所のCO₂排出量の推移(図1)を見ると、過去5年間の売上高は約1兆4千万円で推移しており、安定した売上、利益をあげていると言える。ユーレット(<http://www.ullet.com/2502.html>)のキャッシュフロー計算書の円グラフ(図2)を見ても、本業で得た資金の流れを示す営業活動によるキャッシュ

ら、本業が順調であることが分かる。しかし、今年6月の中間決算では、経常利益が約18%減の278億円に縮小、12月期の通期業績予想でも経常減益を見込んでいる。ライバル各社との競争も激しく、厳しい経営環境が続きそうだ。一方、CO₂排出量は、減少傾向にある。昨年度の排出量は、37万1千トンの排出量は、04年度比約12%減となっており、売上規模を維持しながらもCO₂排出量の削減を着実に進めている。同社は、工場にコージェネレーションシステムや燃料転換などを導入し、電力使用やボイラー燃焼によるCO₂排出量の削減に取り組んでいるという。

貯蔵して後にびんや缶樽詰め工程などに再利用している。昨年度のCO₂の捕集量は約5万4千トンの削減に成功した。6倍にも増えているという。同社は自然エネルギーの利用推進も目指しており、07年には博多工場(福岡市博多区)の屋根に太陽光発電パネルを設置。年間85トンのCO₂を削減しているほか、年間約2500万キロワット時発電する「阿蘇にしほらファーム」に出資し、風力発電事業を支援している。また、製品製造時以外でもCO₂の削減に取り組んでいる。同社が運営する社有林「アサヒの森」(広島県庄原市、三次市)は2165ヘクタールの広さを持ち、第三者機関によって年間1方2200万トンのCO₂吸収量が認証された。さらに01年には、適正に管理された森林に与えられる「FSC認証」を国内で3番目に取得している。一方、物流分野では全アルコール飲料の総輸送距離の短縮を目指し、拠点間転送の低減や物流拠点の集約による直送比率の向上などを推進している。昨年度の輸送量、輸送距離は前年度比約6%減少し、CO₂排出量も6%の削減に成功した。(環境新聞社・江頭佐和子、メディアネットグループ・西野嘉之)

独自の煮沸法など開発

重油から都市ガスへの転換によって、90年度に約105万ギガジュールだった重油使用量を07年度には約34万ギガジュールに抑えている。昨年、ビール醸造時に最も熱エネルギーを要する煮沸工程の時間を短縮することでCO₂排出量を約30%削減する独自の

新技术「PIE煮沸法」を開発し、吹田工場(大阪府吹田市)で導入した。特徴ある独自の取り組みとして、国内の工場に順次導入していく方針だ。また全工場で、ビール発酵工程で発生するCO₂を捕集し、タンクに

ユーレットの財務状況と事業所のCO₂排出量の推移(図1)を見ると、過去5年間の売上高は約1兆4千万円で推移しており、安定した売上、利益をあげている。ユーレット(<http://www.ullet.com/2502.html>)のキャッシュフロー計算書の円グラフ(図2)を見ても、本業で得た資金の流れを示す営業活動によるキャッシュ

ユーレットの財務状況と事業所のCO₂排出量の推移(図1)を見ると、過去5年間の売上高は約1兆4千万円で推移しており、安定した売上、利益をあげている。ユーレット(<http://www.ullet.com/2502.html>)のキャッシュフロー計算書の円グラフ(図2)を見ても、本業で得た資金の流れを示す営業活動によるキャッシュ

ビール業界編①

アサヒビール

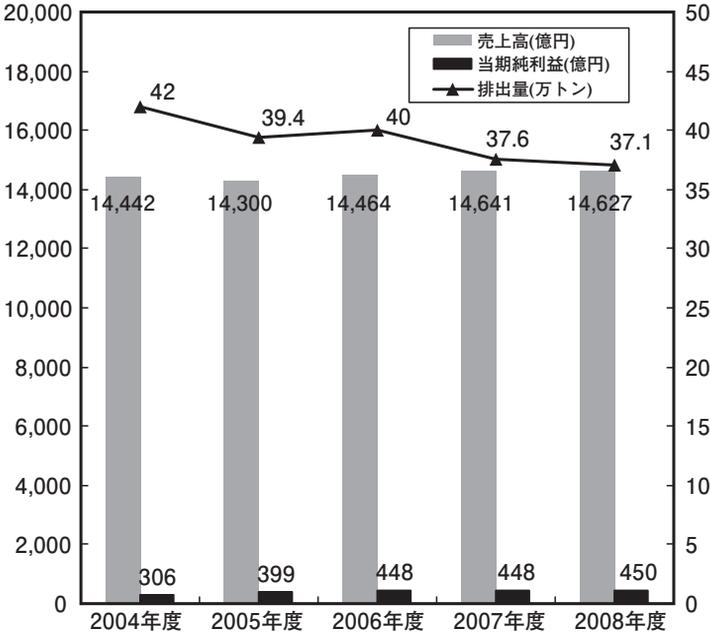


図1 アサヒビールの財務状況とグループ全体のCO₂排出量の推移(アサヒビール発行の環境・社会報告書、ユーレット(<http://www.ullet.com/2502.html>))を基に作成)

図2 アサヒビールのキャッシュフロー計算書(C/F)の円グラフの特徴(ユーレット(<http://www.ullet.com/2502.html>))を基に作成)

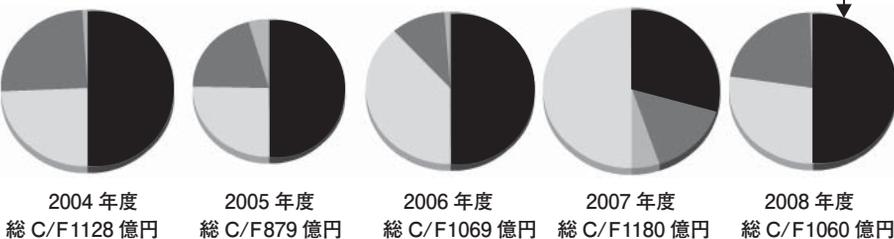


図2

アサヒビールのキャッシュフロー計算書(C/F)の円グラフの特徴(ユーレット(<http://www.ullet.com/2502.html>))を基に作成)